山中湖フィールドトリップについての感想

游毅
Peking University

具裕珍先生、東大のＥＡＡユースと、ＥＡＡのＲＡ達との山中湖フィールドトリップは、自分にとっては勉強になり、心も体も癒される体験であった。山中湖周辺にある富士癒しの森研究所のスタッフさんの紹介をきき、山中寮に滞在し一番強く感じた事は、自然と人間のハーモニー。山中寮でのストーブによる枯損木の利用、ドーム状の木の葉を利用した音楽会、森で産出された木材を使った自宅宿舎、何れも人間が、自然を保護して、自然から資源をもらう協和な関係を示していた。古在ヶ原の落葉の上に踏み込んで、「サクサク」とした声を聴いて、この自然なる音楽に作曲家マリー・シェーファーがいう自然なり「サウンドスケープ」を思いついた。シェーファーはどう自然の音を音楽にとりいれのか？自然の音は、人々が環境、方位、世界の認識にどう繋がっていたのか？そういう問題が頭に浮かぶ。

夜の三島由紀夫のドキュメンタリー鑑賞で感銘を受けたのは芥正彦と三島の弁舌の才、特に芥と三島が、お互いの議論を反論し、逆に自分の議論の支えに転換する事がすごかった。他の全共闘の人々は何れ公務員など社会人になっていても、芥は自分自らの信念をもって生きていたのが、自分に深い印象をのこしました。三島の「僕は全共闘とおんなじ保守的な当時日本政府に不満を持ち、違いはただ自分は天皇を尊重している」という発言から、左翼・右翼の対立に限らず、ラディカルか保守的かの立場もあった事を感じた。これは、『東アジア教養学演習』で読んだ『The Rhetoric of Reaction』の補足にもなった。

山中湖湖畔にて